住民の社会的孤立と地域生活支援
ー「一人にしないまちづくり」に向けてー

空　閑　浩　人

1　はじめに

近年の社会・経済状況のはげしい変化のなかで，人々が抱える生活問題も多様化，複雑化の様相を呈している。児童や高齢者への虐待に見られる子育てや介護に伴う問題，また深刻化する自殺や孤独死の問題，子どもや若者が抱える不登校や引きこもり，さらにホームレスやワーキングプアなどの貧困問題も深刻である。もちろんそれらの生活問題に対応する制度やサービス，また行政や民間団体等による支援活動の充実が求められているのは言うまでもない。しかし，それらの問題の背景として，家族や地域が従来担ってきた相互の支え合い，すなわちインフォーマルサポートが脆弱になっていることが考えられる。我々は改めて，家族，近隣や地域の「つながり」について考えるときにいるのではないだろうか。

本稿では，今日の我々の社会で起こっている様々な生活問題の背景に，

くが　ひろと　同志社大学社会学部社会福祉学科准教授。専門分野は，社会福祉実践（ソーシャルワーク）論。著書・論文，『ソーシャルワーク入門ー相談援助の基盤と専門職ー』（編著）ミネルヴァ書房（2009），『地域包括支援・総合相談事例集』（共著）第一法規（2007），『ソーシャルワークの技能ーその概念と実践ー』（共著）ミネルヴァ書房（2004）など。社会福祉士。

人々の社会的な孤立状況が共通してあることを指摘するとともに，人々の生活を支えるための地域における住民間のつながりの構築とその意義について，関連文献を基にして検討したい。

2　様々な生活問題の背景にある「つながり」の喪失

（1）深刻化する自殺の問題

日本では年間の自殺者数が10年連続で３万人を超えている状況にある。自殺の原因や動機としては，健康問題，経済・生活問題，家庭問題などが挙げられているが，「自殺のキーワードは『孤立』である」（高橋2006）[i)] という指摘にあるように，そこに共通してあるのは誰にも助けを求められない社会的に孤立した状況であると考える。また，高齢者の自殺率が高いことも指摘されているが，それについては次のような指摘もある。

しかし現在では，独居ではなく家族と一緒にいて，なおかつ高齢という人に自殺が多くなっている。（中略）家族がいても，実際には高齢者は孤独に暮らしていて，結局は孤独が自殺の大きな危険因子となっているのである。（筒井2004）[ii)]

つまり，問題は独居か家族との同居なのかという居住形態ではなく，家族や他者との関係がどうかということ，すなわち他者との「つながり」の質なのである。言い換えれば，「主観的な」孤立･無援状態にあることが自殺の危機を高める。自殺の背景にあるのは，社会的かつ「主観的」な孤立･孤独状態のなかでの「生きようとする意欲の低下」なのである。このような深刻化する自殺問題に対して，2006年６月に「自殺対策基本法」が制定されたが，そこには「自殺対策は，自殺が個人的な問題としての

みとらえられるべきものではなく，その背景に様々な社会的な要因があることを踏まえ，社会的な取組として実施されなければならない」（法２条）とされている。自殺問題に対しては，それを決して個人的な問題とするのではなく，社会的問題として捉え，個人が支えられる人間関係としての他者とのつながりの構築を志向して，取り組まなければならないのである。

（２）独居高齢者の孤独死の問題

人口の高齢化が進行するなかで，一人暮らしの高齢者が誰にも看とられずに亡くなるという，いわゆる「孤独死（独居死）」が数多く発生している。2006年５月の『東京新聞』では，東京都内の都営住宅と都市再生機構の賃貸住宅の一人暮らし世帯で,2004年度中に410人が自宅で孤独死していたことを報じている（『東京新聞』2006年５月７日）。それによれば，８割近くが65歳以上の高齢者であるとされ，都会の大型団地で暮らす高齢単身者の社会的な孤立化の状況が明らかにされた。また，2009年１月の『朝日新聞』では，阪神大震災の被災者らが暮らす兵庫県内の災害復興住宅で，2008年の１年間で46人の独居死があったことを報じている（『朝日新聞』2009年１月15日）。さらに2000年以降の復興住宅での独居死者は，９年間で568人になったという。そこには，一人暮らしで近所づきあいがほとんどなく，今も漠然とした不安を抱えながら，ますます孤立化の様相を深める被災者の生活実態がある。

このような孤独死の問題は，高齢社会を迎えた今，決して被災地や一部の地域だけの問題ではない。そして，孤独死の予防のためには，日常的な話し相手の存在や住民同士のつながりが必要なのはいうまでもない。特に高齢者にとっては，地域とのつながりはまさに生活の基盤であり，

そのつながりを失うことが安定した生活の維持を困難にすると考える。今日，地域の自治会や住民による見守り訪問，そこに行けば誰かに会えるというサロンづくりの取り組みなど，住民の孤立防止のための様々な取り組みが各地で行われている。地域における住民同士のつながりが生活の基盤として不可欠であるという認識を共有し，そのような活動を広めていかなければならない。

（3）地域における「つながり」の喪失と生活問題

このような自殺や孤独死に象徴される社会的孤立の問題は，人々がいわば地域社会と無関係に成り立つ「個人単位」のライフスタイルを望むことで，地域や他者との関係性を喪失してきた結果であるといえる。そのような「関係性の喪失」こそが，日本だけでなく世界における様々な社会問題の要因であるという，次のような指摘もある。

いずれにしても，個人が自然，集団，他人から切り離されてきたという状況は，日本にも欧米社会にも共通している。これこそが，現代の日本と世界を覆っている深刻な社会的病理であり，「壊れてゆく日本と世界」を根底で演出している重要な要因の一つではないだろうか。(大木2005)[iii]

今日の児童虐待や介護心中・介護殺人の問題の背景にも，地域とのつながりを失ったなかでの孤立化した子育てや介護の実態がある。これは，地域の人間関係が必ずしも生活の拠り所となっていないこと，すなわち何らかの生活問題に直面したときのセーフティネットの機能を果たしていないということである。このような状況のなかで，我々は改めて生活の基盤としての地域やコミュニティのあり方を問わなければならないと

きにいると考える。

一言で言えば，現代の日本は「地縁・血縁的な『古い共同体』が崩れ，しかしそれに変わる『新しいコミュニティ』ができていない」ということに尽きるように思う。都市化が進み，経済も豊かになって社会が「個人」単位のものになっていく。そうした個人をもう一度「つないで」いく何かが必要なのだが，それがまだできていない。(広井2005)[iv)]

都市化の進行とともに地縁・血縁的な共同体が崩れ，生活が個人単位のものとなるなかで，結果的に様々な生活問題が現出している状況にある。それはすなわち我々の生活を根底で支えるセーフティネットの機能が,地域にない社会であるといえる。そのような機能をこれまでの地縁・血縁的な共同体が果たしてきたのであれば,「それに変わる『新しいコミュニティ』」，すなわち関係性を失いつつある個人同士を再びつないでいくような取り組みが，地域のなかでどうしても必要なのである。

3 「生きて，生活する」ということ

そもそも我々が「生きて，生活する」とはどういうことなのだろうか。「生活」や「生命」を意味する英語として「Life（ライフ)」という言葉があるが，この言葉について次のような指摘がある。

「ライフ」という英語がある。わたしたちのいう生命(いのち)を生活(くらし)と重ね合わせることで,「ライフ」という語は生命というものの社会的な性格を保っている。ひとのいのちが，他人のそれに育まれ，他人のそれと根本のところで支え合

う関係にあるということ。(中略) <生(ライフ)>の原型はそういう他者とのつながり方のなかにあるようにおもわれる。(鷲田2002)[v]

これは，我々の生活や人生，そして生命までもが「社会的な性格」をもつものであり，決して「個」や「個体」としての「個人」の内部で完結するものではないということの指摘である。すなわち，我々が「生きて，生活する」ということそのものが社会的な営みであり，他者とのつながりの豊かさが，我々の生活や人生を豊かにするということを意味している。老人ホームなどの社会福祉施設では，「生活・生命の質（QOL＝Quality of Life)」の維持や向上ということが利用者の生活支援における重要な概念として重視されている。これは,「たんに諸個人の孤立的で抽象的な『生命の質』ではなくて，まさに他者や社会，文化全体との関係のただ中にある生活・生・人生の総体」(竹内1993)[vi] としての「ライフ」の質を意味するのである。このように我々の生命や生活そのものが社会的な性格をもつのであれば，それを現実的・具体的に支え，成り立たせるものは，日常的な他者との関係性やつながりなのである。

人間にとって，他者との関係性の喪失ほど，致命的なものはないのである。他者との関係性は，人間が人間であることの必須条件であって，他者との関係性において自分が存在すると確信できることこそは，人間として生きる意欲の源泉をなしていると私は思う。(小浜2000)[vii]

人が生きようとする意欲は他者との関係性やつながりのなかで，自分の存在が確信できる体験から生まれる。逆に言えば，そのようなつながりを失った状況では，生きる意欲や生活への意欲は生じないのである。

我々は，日々当たり前のように顔を洗い，服を着替え，化粧をし，身だしなみを整えるというような行為を行うが，それはなぜだろうか。もしも毎日が，どこへも行かない，誰とも会わない，誰にも見られない，誰にも関心をもってもらえない日々であるのなら，果たして我々はそのような生活行為を行うだろうか。他者とのつながりのなかで自分の存在が認められるような体験や意識こそが，我々の生活意欲を支え，日常の様々な生活行為へと向かわせるのである。

人を日常的に支えている力は何であろうか。ふだんあまり自覚しないまでもそれは，自分の身になじんでいるものや人や場所であると，わたしは体験的に考えている。（中略）なじんだものや人や場がわたしたちの生活のベースであり，日常を支えている。（小沢2002）[viii]

このような，我々が日常的に体験する人や場所，空間との「なじみの関係」こそが，我々の日々の生活を根底で支えているのである。言い換えれば，この「なじみの関係」の喪失が，社会的な孤立状況やそれに伴って生じる生活問題の背景にあると考える。様々な生活問題を抱える状況のなかで，それでも人々が生きようとする意欲をもち，地域における安定した生活を取り戻していくためには，日常的な「なじみの関係」を維持し，または新たに構築していくことが欠かせないのである。改めて人間は「社会的存在」なのである。人が「生きて，生活すること」を支えるために考えなければならないのは，たんに生物としての「ヒト」ではなく，社会的存在としての「人」への認識と，その生命や生活（ライフ）を支える地域のあり方なのである。

4　地域における「居場所」づくりの必要性

住民の社会的孤立を予防して，地域がセーフティネットの役割を果たすためには，近隣関係が希薄化し，孤立化しつつある住民同士を再びつないでいく「仕掛け」が必要である。それは必ずしも従来の地縁的・血縁的なものだけではない,「新しいつながりの形」としての住民間のネットワークの構築である。すなわちそれは，地域をそこで暮らす人々が生きて生活するための意味のある「場所（居場所)」として機能させていく取り組みである。

人間的であるということは，意味のある場所で満たされた世界で生活することである。つまり人間的であるということは，自らの場所を持ち，また知るということである。(レルフ1999)[ix]

ここでいう場所とは,単なる物理的な空間としてではなく,個人にとって意味のある場所，すなわち「居場所」のことである。そして，様々な生きづらさや生活のしづらさといった生活問題は，そのような居場所がないことから生じるとも考えられる。家庭のなかに，学校のなかに，施設のなかに，職場のなかに，そして地域のなかに居場所があるということが我々の日常の生活を支えているのである。たとえば，子どもの不登校について，次のような指摘がある。

不登校の背景には多くのケースで共通する問題がある。それは，本人が居場所のなさを感じているということと，本人を支えるはずの家庭や親に問題が生じている

ということである。（中略）不登校自体を何とかしようと大騒ぎすることは，しばしば的はずれで，家庭の問題を解決し，本人が安心できる環境を整えることが，まず必要なケースも多い。（岡田2005）[x]

学校に行かない，行けない子どもたち自身を問題視するのではなく，子どもたちにとっての居場所のなさこそ問題視するべきなのである。子どもたちは「不登校」というかたちで，自分たちの居場所がないことを訴えている。家庭が，学校が，そして地域が子どもたちの居場所といえる環境と成り得ているかどうかが問われなければならないのである。

また，ホームレスやワーキングプアなどの経済的に困窮した人々に対しても，「居場所づくり」の取り組みが求められている。貧困状態にある人の「生活相談は，生活保護の申請同行に限るわけではない。それと並んで重要な意味を持つのが，当事者の居場所作り，相互交流である」（湯浅2008）[xi] という指摘もある。生活に困窮する人々が陥っているのは，失業などによる経済的貧困と同時に，「人と人とが助け合うコミュニティの喪失という『関係的貧困』」（生田2007）[xii] の状態なのである。様々な生活問題の解決のために，そして人が生きて生活していくことを支えるために，人と人とのつながりとお互いに助け合う関係，そしてそのような関係が体験できる居場所が様々な形で地域にあるということが必要なのである。

そこには自分が愛情によってとり包まれている，自分自身を表出できる，メンバーによって了解されているなどとしてとらえられる共属感覚がある。居場所は人間にとってなくてはならない場所である。人間が居場所を失ったとき，それは社会的に死を宣告されたようなものだ。（藤井2000）[xiii]

人間が人間として，すなわち社会的存在として生きて生活するためには，「居場所」が必要なのである。それは，自分が愛されている，必要とされている，大切にされているという感覚を体験できる他者との現実的なつながりである。そのようなつながりを地域のなかで再構築することによって，居場所のなさからくる「社会的な死」を防がなければならない。

地域における住民の社会的孤立とそれに伴う様々な生活問題を防ぐために，様々な形でのつながりの再構築による「居場所づくり」の取り組みが求められている。それは住民にとって意味のある地域，住民の生活を根底で支えるために機能する地域，すなわち住民の生活の基盤としての地域を創造し，継承していく取り組みである。町内会やボランティアの活動，また福祉や環境，教育などの様々な分野でのNPOの活動など，地域における居場所づくりの様々な取り組みが行われている。現代社会に生きる我々は，そのような様々な取り組みや活動を通して，従来の地縁的・血縁的なつながりに変わる新しいつながりを形成し，住民の生活を支えるセーフティネットとして機能する地域社会を，意識的に実現していかなければならないのである。

5 おわりに

経済の発展や都市化が進行する社会のなかで，我々の生活は，他者や地域とのつながりよりも，「個」を優先する価値観やライフスタイルへと傾倒してきた。しかし，そのような価値観やライフスタイルの行きつく先に，本当の幸福はあるのだろうか。社会的に孤立した状態のなかで，様々な生活問題を抱える社会，さらに生きる意味や意欲を失い，誰にも

助けを求められずにその生を終える人々を生み出している社会を，本当に「豊かな」社会と言えるのだろうか。「本当に幸せな人生を送るためには，人とつながり，人の幸せのために生きることも必要」（岡田2007）[xiv] なのである。求めるべきは，自分だけの幸福ではなく，他者とともにある幸福のかたちである。

様々な生活問題を抱える社会状況のなかで，経済的な発展に伴う「モノの豊かさ」から，地域における「関係性（人とのつながり）の豊かさ」を志向する価値観やライフスタイルへと向かうことが必要である。確かに，地域の住民同士のつながりや人間関係には，面倒で煩わしい側面も伴うであろう。しかし，それでも地域におけるつながりが生活の基盤として大切であることを，価値や実践として様々な形で提示し，共有していかなければならない。それは，人が「生きて，生活する場所」としての地域社会の再構築であり，すなわち，誰もが安心して暮らせる「一人にしないまちづくり」の取り組みなのである。

そこに暮らす人々も，そこを訪れる人々も，人との「つながり」の豊かさを享受できる。今も未来も，京都はそんなまちでありたい。

【参考文献】

ⅰ）高橋祥友『自殺予防』岩波書店（2006）
ⅱ）筒井末春『うつと自殺』集英社（2004）
ⅲ）大木昌『関係性喪失の時代ー壊れてゆく日本と世界ー』勉誠出版（2005）
ⅳ）広井良典『ケアのゆくえ科学のゆくえ』岩波書店（2005）
ⅴ）鷲田清一『死なないでいる理由』小学館（2002）
ⅵ）竹内章郎『弱者の哲学』大月書店（1993）
ⅶ）小浜逸郎『なぜ人を殺してはいけないのかー新しい倫理学のためにー』洋泉社（2000）
ⅷ）小沢牧子『「心の専門家」はいらない』洋泉社（2002）
ⅸ）エドワード・レルフ著，高野岳彦ほか訳『場所の現象学ー没場所生を越えてー』筑摩書房（1999）
ⅹ）岡田尊司『子どもの「心の病」を知る』PHP（2005）

xi）湯浅誠『反貧困ー「すべり台社会」からの脱出ー』岩波書店（2008）
xii）生田武志『ルポ最底辺ー不安定就労と野宿ー』ちくま書房（2007）
xiii）藤竹暁「居場所を考える」藤竹暁編『現代人の居場所（現代のエスプリ別冊）』至文堂（2000）
xiv）岡田尊司『社会脳ー人生のカギをにぎるものー』PHP（2007）
川崎二三彦『児童虐待ー現場からの提言ー』岩波新書（2006）